

ライブラリアンの見た世界の大学と図書館 ～図書館利用行動を中心に～

日時：2016年6月25日（土） 15：00～17：00

場所：同志社大学 今出川キャンパス 良心館2階 RY202教室

パネリスト：

マクヴェイ山田久仁子（ハーバード・イェンチン図書館）

グッド長橋広行（ピッツバーグ大学図書館）

田中あずさ（ワシントン大学図書館）

バゼル山本登紀子（ハワイ大学マノア校図書館）

司会：江上敏哲（国際日本文化研究センター）

主催：科学研究費基盤研究（C）プロジェクト（課題番号：16K00450 研究代表者：原田隆史）「人の真の情報ニーズを汲み取るコンシェルジュ型資料検索システムの構築」

（編者註：このシンポジウムの様子は動画でもごらんいただけます。スライド、会場の様子についてはそちらをご参照ください。<https://www.youtube.com/watch?v=r4byVlaqqU>）

原田：同志社大学の原田と申します。このシンポジウムは科学研究費の補助金で開催させていただいております。「人の真の情報ニーズを汲み取るコンシェルジュ型資料検索システムの構築」という科研費がございまして、その中で図書館を利用する人々の行動について研究をしております。実際に図書館を利用する人々に東西さまざまな違いがあるかという内容も含み、さらに大きく日米の図書館の事情についてお話いただくシンポジウムを設けさせていただきました。本日は国際日本文化研究センターの江上さんの司会で、海外から4名の方に来ていただきまして、シンポジウムを開催するという事になっております。後ほどパネリストの方々につきましては司会の方から紹介があると幸いです。

来週についても紹介させていただこうと思います。今日のシンポジウムだけではもっ

たいたいと思ひまして、今日この会場には大学図書館の方ですとか、またはラーニング
コモンズの方ですとか、そういう現職の方も大勢来ていただいております。その方々に
来週の日曜日の夜にお集まりいただいて、今日のシンポジウムを受けて日本の大学図書
館員が論じる世界の大学図書館というような、アンサーシンポジウムを開催しようと考
えています。

ここから先は司会をお願いしている江上さんにマイクをお渡ししたいと思います。

江上：国際日本文化研究センターの江上と申します。どうぞよろしくお願ひ致します。
本日はさまざまな人にご来場いただいて本当にありがとうございます。まさかこんなに
人が来ると思ひてなかつたんですけど、気合入れてやらさせていただきます。今日はです
ね、ライブラリアンの見た世界の大学図書館～図書館利用行動を中心に～というテーマ
でシンポジウムを開かせていただきました。シンポジウムのパネリストとして今回4人
のライブラリアンの方を招いております。4人の方々はそれぞれ、アメリカの大学図書
館で日本語の資料を収集するとか、日本語の情報を提供するといったかたちで、日本研
究分野の専門のライブラリアンとして働いていらっしゃる方々です。そういう4名の方々
に来ていただいて、例えば日本とアメリカの大学の在り方の違いとか、利用者、学生さ
んとか研究者の利用行動、利用の仕方の違いとか、あるいは海外で働くとはどういうこ
とか、あるいは日本から海外へ留学生として留学しに行くとはどういうことなのか、現
地でどんな勉強をすることになるのか、というようなさまざまな観点からお話をしてい
ただいて、今日はたくさんの学生の方にも来ていただいておりますけれども、自分も留学し
てみようとか、自分も海外で働いてみようとか、考えていただけたらなと思ひておりま
す。大体こんな感じなんですけれども、よろしいでしょうか。

では、パネリストの皆さんをご紹介していきたいと思ひます。皆さんアメリカの地図
をざっくり思い浮かべていただいて、東海岸から順に並んでいると考えてください。1
人目がハーバード・イェンチン図書館のマクヴェイ山田久仁子さんです。2人目がピッ
ツバーグ大学図書館のグッド長橋広行さんです。3人目がシアトルにありますワシントン
大学図書館の田中あずささんです。4人目がハワイ大学マノア校図書館のバゼル山本
登紀子さんです。今日はこの4名でいろいろお話していただくんですけども、大体この
ような構成でお話をさせていただこうと考えております。最初に自己紹介代わりに皆さん
がどんな仕事をしているのか、どんな図書館なのかということをお話していただいて、
それから大きく2つに分けて、利用行動というテーマと、それから学生の様子はどうか
というテーマで、お話していただく。そういったテーマでお話していただいた後で、皆
さんの配布資料として小さい紙、A4を4つ切にしたやつなんですけれども、コメント・
質問を書いていただくための小さい紙を用意しております。後でそれを回収していた

だきまして、それをもとに皆さんのコメントをご紹介したり、あるいは皆さんの質問にお答えいただいたり、というようなことをさせていただこうと思っております。大体こんな感じで進行しようと思っております。皆さんよろしいでしょうか。

それでは早速なんですけれども、自己紹介代わりに、ハーバードのマクヴェイさんから順番に、ご自分の自己紹介と、普段どんな仕事をしているかということと、それからどんな図書館なのかというようなことをお話しいただけたらと思います。どうぞよろしくをお願いします。

マクヴェイ：こんにちは。今ご紹介にあずかりました、ハーバード大学イェンチン図書館のマクヴェイ山田久仁子といます。図書館の概要なんですけど、ハーバードの図書館の全体を言いますと、今73の図書館があります。かつては100を超えていたので、ハーバードはいわゆるアメリカのアカデミックライブラリーのディセントラライズドという分散型図書館の典型なんです。未だにそのレガシーでまだ70近くの図書館があり、ほとんどは専門図書館で、あとは総合図書館のワイドナーライブラリーというところがあります。ハーバード・イェンチン図書館はその中の一つなんですけど、その中ではかなり大規模で、蔵書数で言えば大きいです。ハーバード・イェンチン図書館の現在の蔵書ですが、概数で約140万冊の図書を所蔵し、加えて11000タイトルの雑誌があります。主に、私どもパネリストはみんな同じなんですけど、CJKと総称される言語を扱っています。つまり、Chinese、Japanese、Koreanが大体東アジアコレクションの主な言語構成で、今言った140万冊のほとんどがChinese、Japanese、Koreanの言語で書かれた資料です。他にイェンチン図書館としては満州語、チベット語、サンスクリットなどの資料が若干あります。それからベトナム語はもう少し大掛かりなコレクションです。

イェンチン図書館というのは、もともとは1928年にイェンチン研究所がハーバードとは独立して東アジアを研究するためにできて、その付属図書館として設立されたものです。歴史的に1928年の発足以来、ハーバードのキャンパスに本部がひとつあり、もうひとつは、当時の北京大学にありました。今の北京大学の前身ではあるんですけど、そこが1928年当時はアメリカの宣教師が中心になって運営していた北京大学でした。その2ヶ所が中心となって運営した研究所の付属図書館として発足しました。設立当初からハーバードのキャンパスにあったこともあり、イェンチン研究所のメンバーはハーバードの教授ということで、初代の研究所所長もセルゲイ・エリセーエフというジャパノロジストです。漱石の木曜会にも参加していたことで有名なんですけど、日本研究者が初代のディレクター。その後ずっといろいろな東アジア研究者がイェンチン研究所のディレクターとなります。そのイェンチン研究所ができる1928年以前には1913年から16年、東京帝国大学の姉崎正治教授と服部宇之吉教授、姉崎教授は宗教学で、服部教授は儒教とか中国

哲学の先生ですけど、その2人を日本のコンコーディア協会（帰一協会ともいい渋沢栄一らが創設した団体）が派遣したのですが、ハーバードがそれを受け入れて、日本関連のコースを教えました。これがそもそものハーバードでの日本コースの始まりなんですけど、その頃からやはり日本研究のための資料が集まり始めて、かつ姉崎教授、服部教授が残されたり寄贈された資料がそもそもの日本コレクションのベースとなっています。あと1928年にできたイェンチン図書館の初代ライブラリアンが、裘開明という中国の方なんですけど、彼は *Yenching Classification* といって、北米アカデミックライブラリーの東アジアコレクションでは20年ぐらい前まで使われていたイェンチン分類法を考案した人でした。ただ、イェンチン図書館も今、基本分類は議会図書館分類を採用しています。これで大体図書館の概要は終わりです。ただハーバードの場合は図書館自体はもともと歴史的に大所帯というか非常に大きいところで、かつてハーバード図書館全体で100以上あったということもありますけども、スタッフが1200人いたんですね。その後いろいろな組織の変動があって、現在ハーバード図書館のスタッフの数が800人ぐらい。

江上：全学でですか？

マクヴェイ：ハーバード全体で。ということでとても大きい所帯です。次が私の仕事のことなんですけど、パネリストの皆さんは共通していると思いますので、あまり皆さんの言うことを取らないようにしますね。基本的にはみんないわゆるジャパニーズビブリオグラファーとか、あるいはジャパニーズスタディーライブラリアンという肩書なんですけど、私はライブラリアンフォーザジャパニーズコレクションといいます。要はコレクションディベロップメントというのが非常に大きなひとつの柱で、

江上：蔵書構築ということですね、日本語で言うと。

マクヴェイ：そうですね。要するに選書して蔵書を作っていくという。それがひとつ大きな柱で、かつては非常にそれが大きなひとつの柱だったからもっと重視されてたんですけど、やはり図書館もどんどん時代の流れで、いろいろ変わってきましたので、今はもうひとつ大きな柱がレファレンスです。レファレンスっていうのは、アメリカはパブリックサービスっていうのがひとつ確立したプロフェッショナルの仕事なので、コレクションディベロップメントをするビブリオグラファーとパブリックサービスをするレファレンスの仕事ははっきり分かれていたんですけど、最近はどうも近づいているという感じで、私の仕事自体でもこの2つは不可分という感じで、両方ともあります。このレファレンスに関してもアウトリーチとか、あるいはパネリストはみんな作ってるんですけど、

リブガイドというオンライン・プラットフォームでいろんなレファレンス情報をそこから流していたり、いろんなことをしています。で、日本研究っていうのが北米においては基本的に人文学・社会学を中心に、特に人文学が強いということで、やはりその辺が私たちの仕事の大きな部分になってはいます。

3番目のどういう経緯で今に至ったかっていうのは、最初は日本で、大学出てすぐ就職したのは日本近代文学館という駒場の駒場東大前にある財団法人の図書館でした。これは私立の小さい図書館なんですけど、非常に文学館というよりは、今文学館たくさんあるのでほとんどそうだと思いますけど、ミュージアム的要素のある図書館で、原稿とか手紙とか、それだけじゃなくて、漱石の着物とか机とかそういうものを収集、収集というかたいていの場合は作家の遺族の方が文学館に寄贈されるということが非常に多かったです。そこで、今でもやってると思うんですけど、館主催の文学展とか文学教室とかにも関わりながら、資料の目録を採っていました。そこで7年間働いた後、ボストンに製本を学びに行ったんです。製本っていうのはハンド・バインディング、西洋の伝統的製本なんですけど、2年間のプログラムだったんですけど、そこで製本を勉強していました。ちょうどその頃日本は勢いのある国だったので、ハーバードで小さな Documentation Center on Contemporary Japan っていう、現代研究のための資料センターを作ったんですけど、そこで製本学校2年目からパートタイムでお手伝いを始めました。そこで結局、私のボスに当たる人が政治学者だったので、研究に戻るからっていうことでそこを引き継いだ形で、ドキュメンテーションセンターで10年間働きました。一応アメリカだと普通はライブラリーサイエンスの修士号がいるんですけど、日本での経験を認めていただけて、それで一応プロフェッショナルライブラリアンとして雇っていただきました。その間に地元のシモンズカレッジっていうボストンにあるライブラリースクールでライブラリーサイエンスのディグリーを取りました。その後1999年から今のイェンチン図書館におります。ありがとうございました。

江上：ありがとうございます。今のお話によるとハーバードには2つあるんですかね、日本関係の図書館が。

マクヴェイ：厳密にいうと、日本語の資料はハーバードでは美術図書館とそれからロースクールに東アジアコレクションというのがあります。それとイェンチンが主なところなんです。今言ったドキュメンテーションセンターっていうのはむしろその当時、今までになかった新しい分野、日本に関するポリティカルサイエンスの需要が高まって、その場合は伝統的な日本研究の人たちほど日本語を多用しないので、英語の資料が主となります。特に政治学とかビジネススクールのようなところの人たちも必要としてたので、そ

ういう需要を満たすために作られたのがドキュメンテーションセンターです。

江上：ありがとうございます。ではお2人目のピッツバーグ大学のグッド長橋広行さん、お話をお願いします。

グッド：こんにちは。ピッツバーグ大学のジャパニーズスタディーズライブラリアンとして働いています、グッド長橋広行と申します。ピッツバーグ大学は学部生が約25000人、院生が9700人、教員が6000人、職員が7000人ぐらいという、アメリカでいいますと中規模の大学です。大学図書館は人文学、社会科学、自然科学の分野をカバーするユニバーシティライブラリーシステムという組織としてあるんですけど、附属図書館と理解していただいていると思うんですが、そこにヒルマン図書館という本館と、9つの専門図書館、そしてアーカイブセンターと4つの地方キャンパスの図書館から成り立っています。それとは別に法学図書館と医学図書館があります。所蔵規模でいいますと、大学図書館が約685万冊、法学図書館が21万冊、医学図書館が15万冊、この3つの図書館全体なんですけれども電子書籍は合計で136万冊あるという数が出ています。e-booksは毎日増えてますので正確な数は出ませんが、そしてまたe-booksは図書館全体で使ってますのでこの図書館が何冊というのは出てこないと思うんですが、こういった数になります。特に医学図書館や法学図書館は蔵書冊数が少ないと思われませんが、もうほぼ電子資料に頼っている方が多いので、蔵書数はかなり少なくなってます。ピッツバーグ大学の日本語資料は東アジア図書館として本館の3階にありまして、中国語、韓国語、日本語と3ヶ国語で成り立っています。全体としては43万冊、日本語が約13万冊ぐらいの蔵書数。現在も購読している日本語の雑誌は約80タイトルぐらいになってます。昔はかなり多かったんですが、電子化された、特に紀要とかそういったものは電子媒体でほとんど手に入りますので、今どんどん減らしておりますので、かなり減ってきています。電子書籍は最初、3年ほど前に200冊ぐらいテストで買って見たんですが、あまり使用されていません。そして2015年に試験的にDDA、Demand Driven Acquisitionという、購入していないすべてのタイトルをOPACにのせて、学生がクリックすると購入になるという、

江上：まだ購入はしてないんだけど、カタログでそれがヒットして、それを学生が読みたいと思ったらクリックすると、買うことになるという。

グッド：そうです。英語の書籍の場合は2回、3回のクリックで100%の購入になるんですけど、日本語の場合は1回のクリック、書籍の10%以上を読んだりすると

100%の購入になるという仕組みになっています。

江上：1冊分のお金を払わなきゃいけないと。

グッド：そうです。当然日本語の場合は電子書籍の価格が印刷体より高く設定されていますので、ちょっとこれは試験的に導入しようかどうかと思ったんですけども、幸か不幸かあまり購入がなく、今まで来ております。1年経って実はまだ5、6冊しか買われておりません。そういった感じですけども、日本語資料の中で特に収集に力を入れているコレクションは、中世の美術史、幕末明治初期の医学史、近代文学、日本近代経済史、中国近現代の経済、会社史などです。普段どんな仕事をしているかというのは、マクヴェイさんもお話したように、蔵書構築がまず挙げられます。今の、通常の英語を中心とした学問のライブラリアンは、今リエゾンライブラリアンというタイトルで、ビブリオグラファーだった人たちがもっと外に出て、学生たち、先生たちと密にコミュニケーションをとりながら、レファレンスとかインストラクションをやっているということになってきてまして、英語はかなりDDAが使われていますので、あまりコレクションディベロップメントに時間を割けないというか、割かなくてもよくなってきているんですけども、

江上：ライブラリアンが選ぶんじゃなくて、クリックさせることで買うと。

グッド：そうですね。特に最近エンジニアリングの担当のライブラリアンはほとんどやってない。ほとんどの全ての時間をインストラクションとレファレンスに充ててると言っていました。最初は寂しいと言っていましたけれども、今はそっちの方が楽しいと言っております。ですけど日本研究というのはまだまだ書籍に頼っているところが多いので、どうしても蔵書構築に時間を割かなければいけません。日本研究というのは1つの学科があるわけではなくて、文化人類学とか社会学とか宗教学とか政治学とか、様々な学科で日本を中心に研究している先生方の資料を集めますので、あらゆる学問の資料を集めなければいけません。私のところは年間約600万円の予算がありまして、それで年間、書籍を中心にですけども、インターネットの情報ですとか、出版者からたくさんパンフレットを送ってきますので、その中から選んだり、今は新刊のリストをe-mailでも送ってくれます。その中から選んで先生の研究テーマとか、講義の内容に沿ったものを集めています。また、特に先生の研究テーマがかなり絞られている場合は、そのための研究書籍を徹底的に集めようという形にもなってまして、例えば宗教学の先生は今、内観（ないかん）療法というものを研究してまして、これに関しては100冊以上の書籍と雑誌

を集めてます。内観というのは宗教的な部分と医学診療法治療の両方があるんですけども、そういった学会の雑誌ですとか、内観の研修道場の方に問い合わせ販売されていない資料を集めるとか、そういったこともしております。

江上：「ないかん」はどういう字を書きますか。

グッド：内観とは内を観るといってですね、ひとつの修行なんですけども、もともと始めた人はお坊さんだったんですけど、自分の中を見つめることで悟りを開くというか、1週間とにかく部屋にこもって自分の内を見つめ続けるんですよ。うちの先生もこれをやったんですけども、それをやることで心理療法にも役立つということで、今医学でも内観心理療法学会というものがあります。そういった資料を徹底的に集めたりしております。それとともにレファレンスやインストラクションも重要な仕事になってます。そこはマクヴェイさんもおっしゃっていたので割愛させていただきます。その他に、ここにいるメンバーの皆さんそうなんですけども、学内の仕事だけではなくて、北米全体の日本研究ライブラリアンの組織がありまして、その中で委員をやったりしてますし、学内では学内で司書たちの集まりのコミッティがありまして、そこで勉強会を開催したりする委員会の委員をやったりもします。私は特に社史の研究会というものを10年ほどやっておりまして、そこで社史のデータベースを wiki を使って作ったものを運営したり、あと電子ジャーナルを編集長として出版したりもしています。

どういった経緯で海外で働くことになったのかというのは私の場合長いので、かなり割愛しないとイケないんですけど、年齢はパネリストの中で一番上だと思うんですけど、ライブラリアンの経験としては10年ぐらいです。その前にまずは商社マンをやったり、それからアメリカで地方のテレビ局で働いたり、それから全米日系人博物館というところで通訳の仕事や資料館の仕事をしてまいりました。その最後の博物館の資料館の立ち上げに関わったんですけども、そこで初めて司書の方に出会いまして、その方は UCLA を卒業した日本研究の司書の方で、その方と働いていて面白いな、と。ゼロからコレクションを作り上げる面白さを感じまして、もう一回大学に戻って司書の勉強をして、そして卒業する時期に周りを見ましたらピッツバーグのポジションが空いていたのでそこに行った、という感じです。以上です。

江上：ありがとうございます。では3人目、シアトルのワシントン大学の田中あずささんから。

田中：はじめまして。ワシントン大学の田中あずさといいます。私のポジションは

Japanese Studies Librarian というんですけれども、ワシントン大学といいますとですね、首都のワシントン D.C. と間違えられることがあるんですけど、西海岸にあるワシントン州にある州立大学となります。有名なのは Amazon ですとかスターバックスですとか、マイクロソフトとかの会社がある都市なので、シアトルというところ皆さんももしかしたら聞いたことがあるかもしれません。そのワシントン州シアトルにあるワシントン大学ですけれども、ここは学生数全部で4万人程度の大学になるんですけれども、春になるとこのように桜が満開になってきれいなキャンパスですので、もしいらっしゃる場合は4月にいらっしゃるといいかもしれません。さて、そのシアトルにあるワシントン大学の UW Library East Asia Library 東アジア図書館というところで働いておりますけれども、そこのミッションを書き出しました。私たちのライブラリーでは「人と知識を結ぶことで知的発見と生活の質の向上をうながす」というミッションの下で働いております。この写真はメインライブラリー、Suzzallo Library のリーディンググループになります。結構観光客の方もたくさんいらっしゃるところです。そこで、私たちのライブラリーが大切にしていることがいくつかあるんですけれども、そのいくつかを紹介することで私たちのライブラリーをご紹介しようと思うんですけれども、まず User-centric っていう言葉があって、ユーザーセンターというか、利用者を中心にした図書館ということを目指しています。図書館はキャンパスに16図書館があるんですけれども、そこに1年間で500万人の利用者がやってまいります。500万人ってどのくらいなんだろうってちょっと想像がつかなかったので調べてみますと、京都府の人口が260万人ぐらいいらっしゃるので、その倍よりちょっと少ないくらいの方が利用に来るといって、そんな図書館になります。そして、多様性をとても重視してまして、多様性というのはですね、例えば人種ですとか、年齢、18歳で入学してくる学生ばかりではなくリタイアして入ってくる学生の人たちもいますし、障害をもった方ですとか、いろんなジェンダーの方がいらっしゃいますので、そういった利用者の方に使っていただけるような図書館を目指しています。いろんな利用者の方がやってくる図書館で、アセスメントもとても重視してまして。例えば図書館の家具ひとつ買うにしても、利用者にアンケートをとって、椅子に車がついてるほうがいいとか、机が動かせるほうがいいとか、壁は書けるようにしてとか、そういったことをちゃんとアンケートをとってから行動に移すようにしています。図書館というところはライブラリアンの夢をかなえるところではなくて、利用者の夢をかなえるところだっていうふうに言ってます。それから、User-centric ということで、利用者の皆さんは私たちが働いている時間に研究したり作業しているわけではないので、24時間でできればサービスを提供したいということで、24時間空いている図書館もありますし、それからレファレンスサービスも24時間可能になってるんですが、これはどうしているのかというと、OCLC という機関があるんですけども、

江上：OCLC っていうのは、世界の図書館が加盟している協会みたいなところで、いろんな国の図書館がサービスを楽しんだり総合目録を作ったりというようなことをやっている、そういう組織です。

田中：テスト出ますよね、これ。

江上：出ますね。

田中：そういった OCLC という組織に加入しているメンバーなんですけれども、その中で加盟メンバーは世界中にあるんですが、例えばシアトルが夜で学生たちが勉強していて、分からないことがあった時に、オンラインのレファレンスでチャットができるようになってるんですね。これが、私のところに来るのではなくてですね、シアトルではない場所、今昼間である場所、例えばもしかするとヨーロッパであるかもしれないしオーストラリアかもしれない、ちょっと分からないですけど、そういったところにいるライブラリアンにつながるようになっていきます。逆に、そういった地域で利用者が何か質問がある時にシアトルのライブラリアンが答えるといったこともしていて、おそらく今日いらっしゃっている方の大学もおそらく使っている…… Ask Us 使ってますか？

バゼル：QuestionPoint。

田中：QuestionPoint をハワイ大学は使ってらっしゃるそうです。

江上：QuestionPoint という名前のサービス。

田中：そうです。ワシントン大学とハワイ大学とは時差が4時間ぐらいですよ？

バゼル：西海岸と3時間、東海岸と6時間。

田中：という時差を利用してこういったサービスを使っています。それからもうひとつ大切にしていることはコラボレーション。協力ということですね。例えば Writing and Research Center というところがあるんですけども、これは学生がライティングの宿題が出たときに出かけて行って、そこでチューターの方にライティングの仕方とカリサーチの仕方を教えてもらう場所なんですけど、そこは英語のデパートメント、英語学科の大学院の方、ライティングの得意な学生たちが、アンダーグラジュエイトで書き方

が分からない人たちに教えてくれるっていう選択になっています。そういった教育の場が図書館の中にあります。それからリサーチcommons、同志社の図書館にはこの階でしたっけ？ 素晴らしいリサーチcommonsがありますけども、そういった協力して研究・勉強できるような場所が University of Washington 図書館にもありますし、あとアクティブラーニングの教室もあります。それから Hathi Trust っていうのもこれも協力組織なんですけども、デジタル化をいろんな大学図書館で進めていきたいと思いますという目的で動いているプログラムなんですけども、そういったところにも参加しています。それから Orbis Cascade Alliance っていうのはローカルな、アイダホ州とオレゴン州とワシントン州をつないだコンソーシアムなんですけども、これもまた資料の貸し借りですとか、いろんなプロジェクトの共同作業を進めているコンソーシアムになります。

さて、ちょっと長くなりましたが大丈夫ですかね。それでですね、16図書館あるとお伝えしたんですけども、その中にある1つが東アジア図書館というところで、私が働いている図書館なんですけども、そこは東アジア研究をサポートしてまして、68万アイテムがあります。アイテムの中には書籍だけではなく電子図書とか、メディア関係のものもあって、日本語、中国語、韓国語の資料が入っています。その中の日本語のコレクションを担当してるんですけども、主な科目としては、文学、歴史、政治、経済などを担当してまして、貴重書、武艦、外邦図、それから美術書などもあります。私の仕事なんですけども、これは他の皆さんとほぼ同じなんですけども、全く同じではないと思うんですけども、コレクション構築、リファレンス、それからインストラクションとファンド探し、予算を取ってくる仕事もしております。

どのようにしてライブラリアンになったかっていう話なんですけど、私は日本の大学を卒業した後、韓国学を勉強したくてですね、アジアを出て韓国学を勉強しようと思いついて、実は今働いているワシントン大学というところに入学しました。そこで韓国学の修士を取ったんですけども、その時に留学生として本当に苦労したんですね。その時に天使のように助けてくださったのがライブラリアンたちだったんですけども、それで私はこういう人たちになりたいと思って、図書館員になろうと決めました。まあしかし、聞くところによると図書館学のマスターがいるよっていうことで、そんな大きいリスクを取る前に、まずは試してみようということで、東海岸に移りまして、コロンビア大学という大学、ニューヨークにあるんですけども、こちらの東アジア図書館でアーキビストアシスタントという仕事を1年間やらせてもらいました。そしてですね、毎日起きるのが楽しみで、これは天職だと思ってライブラリースクールに行きました。ライブラリースクールはシラキュースというニューヨーク州にあるところなんですけども、こちらに行きまして、最初に仕事が決まったところはミズーリ州というところにこれまたワシントン大学という、ややこしいんですけど、大学がありまして、ワシントン大学セ

ントルイスというんですけど、そちらの東アジア図書館で今と同じ日本研究司書のお仕事を始めました。そちらに4年ほどいたんですが、母校ワシントン大学のポジションが空いたと聞いたので、そちらに戻ってきたという次第です。

それですね、あと3枚スライドがあるんですけど、図書館員になるためのステップっていうのが、ライブラリースクールを出た後の仕事探し、就職活動がどんな仕組みになってるかっていうのを、もしかすると学生の皆さん興味あるかと思ってお話しようかと思っただんですけどいいでしょうか。まずですね、スタートは日本と同じく書類審査があります。履歴書を書いて、私はあなたの図書館にこのように貢献できますという書類をまず出します。

江上：自己アピールですね。

田中：自己アピールです。それが通りますと、次に電話のインタビューがあります。選考委員会对自分で、電話でインタビューされる。

江上：対面ではなくて電話でインタビューされる。

田中：まず電話ですね。そこまでで最終5人ぐらいまで絞られていますけども、その時に30分ぐらい電話で話すんですが、出る順みたいな、こういうこと聞かれたよっていうのが情報で出回っているんで、準備はできるんですが、私はものを忘れてスライドを書いたりするので、電話がかかってくる前にこれだけ準備したんですね。まず自分の名前を忘れないように名前を書いて、あと履歴書を書いたりだとか、5年後何をしたいですかとかよく聞かれることなので、5 years とか書いてあって、私は5年後何をしたいかだとか、あとチームワークで何をしてきましたかだとか、いろいろ準備して臨みました。電話のインタビューが終わると、次にキャンパスインタビューに呼んでもらえます。キャンパスでは大体2日ぐらい過ごすんですけども、これから一緒に働くことになる方たちと何十人も会うことになります。それからほとんどの場合、サブジェクトライブラリアンはほとんどの方がそうなんですけれども、お題をいただいて、そのお題についてお話ししなさいという課題ももらうんですね。これはパブリックスピーチができるかとか、インストラクションで話ができるかだとか、それからまたお題についてちゃんと知識を持ってるかだとかを試させるためだと思うんですけども、私はアンダーグラジュエイト、学部生と院生が利用者としていて、その時にインストラクション、図書館ワークショップで何に注意しますかっていうお題だったと思うんですけど、とにかくそんな感じで就職活動は進みます。それで晴れてライブラリアンになって今日はここにおります。あり

がとうございました。

江上：ありがとうございます。では最後、ハワイ大学のバゼル山本登紀子さんに自己紹介がてらお話をお伺いしたいと思います。

バゼル：どうもありがとうございます。まずちょっとサーベイをしたいと思います。ハワイに行ったことがある人！ あ、結構いらっしゃいますね。どうもありがとうございます。というのは、私はハワイというところから来ているんですけども、ハワイは1つの島からできているのではなくて、5つの島があります。それはハワイ島、オアフ島、モロカイ島、マウイ島、それからラナイ島の5つの島から成っています。その5つの島にそれぞれハワイ大学の分校があります。10キャンパスが5つの島に分かれています。私がいいますこのマノア校というのは、その中でも高等教育研究機関、フラッグシップキャンパスと言われているところなんですね。ハワイ州全体では5万人ぐらい学生さんいらっしゃるんですけども、その中でオアフ島にあるマノア校は大体2万人ぐらいの学生さんが勉学に励んでいらっしゃいます。それぞれの10キャンパスにライブラリーがありますが、マノア校図書館はその中でも一番大きな研究中心の図書館です。

マノア校図書館には約50人の私と同じような専門ライブラリアンと呼ばれている人がいます。本学ではライブラリアンも教授と同じファカルティというポジションです。このシステムでは、就職した時は終身雇用ではなく、テニユア制、テニユアトラックというポジションで雇用され、最初の4年間を probation period（試用期間）として働きます。試用期間を経て4年経った後に、テニユア審査という査定があり、その査定に通るとテニユアの資格を得るというシステムになっています。たやすいものではありませんが、一生懸命やればテニユアが取れるということでみんな頑張ります。しかしテニユア査定の前にも中間査定があり、期待される水準、つまり今いるポジションに定められた職責に見合う仕事をしていないと、試用期間の継続をうちきられることになり、職を去らなければならないという厳しい環境におかれています。

マノア校図書館は中規模ぐらいの大きさです。約400万冊ぐらいの蔵書があます。ビジネス・人文・社会科学部、科学・技術部・ハワイ・太平洋部など、構築・管理するコレクションの種類により部が分かれています。その中の1つがアジアコレクション部で、アジア関連の資料の構築、管理、アクセスの促進、レファレンスサービスを担当しています。アジアコレクション部の中は、中国、日本、韓国、東南アジア、南アジア、東北ロシア、フィリピン、そして今度新しくできた沖縄コレクションがあり、それぞれに1人ずつ私のような専門司書、専門ライブラリアンがいます。米国本土では東アジア図書館が独立しているところが多いのですが、当館では中国・日本・韓国、いわゆる CJK

コレクションがアジアコレクションという広範囲なコレクション部の中に入っています。この地域研究資料を取り扱う部は、大学にある地域研究センターと密に結びつき連携しています。日本コレクションは日本研究センターと、中国コレクションは中国研究センターと、という具合です。東南アジアにあるフィリピンと日本にある沖縄がどうしても別の資料群になっているのか不思議に思われるかもしれません。それは、ハワイという地域に特有な歴史的背景があるからです。ハワイにはフィリピンと沖縄からの移民が非常に多く、移民研究を含めたフィリピンと沖縄を研究する研究センターがあり、そのセンターを資料の面から支援することが必要だからです。

ライブラリアンがファカルティーであるということは、ライブラリアンも日本研究をなさっている先生方で構成されている日本研究センター教授会の一員になれるということです。日本研究に関連する諸事項を相談し、センターを運営していく執行部は Executive Committee ですが、そこにライブラリアンもメンバーとして参加しています。教授陣と一緒にライブラリアンも加わり、いろいろなことを相談したり、企画を立てたり、意見・情報交換をしています。

また、本学ではファカルティー組合が非常に強く、それぞれの司書のステータスと資格が決められています。例えば、当館のライブラリアン職に応募したい方は、必ずライブラリーサイエンスのマスター（修士）を持っていないけません。図書館情報学の修士学位があれば Librarian 2 というエントリーレベルのライブラリアン職に応募できる訳です。Librarian 3 の次の Rank に応募するには、図書館情報学修士に加えてもう1つ修士を取得している必要があります。応募してくださる方で Ph.D. を持っている方でそれでいいんじゃないかなっておっしゃられることもありますが、

江上：Ph.D. というのは博士号ですね。

バゼル：はい、博士号です。博士号を持っていればライブラリアンになれるっていうところもいっぱいあるんですよ。ハーバードもそうだと思いますし、特に私立の大学は Ph.D. を持ってればライブラリアンになれるんですけど、前述しましたように当館は組合が強く、ライブラリアンの資格が契約として定められているものですから、必ずライブラリーサイエンスのマスターを持っていないと応募できません。応募する際には気を付ける必要があります。

同志社大学とハワイ大学には非常に長い歴史があります。私が管理しています日本研究資料を作られた方は、1920年に同志社大学の学長を退職されて、ハワイ大学に日本研究プログラムを作るために招聘された原田助先生という方なんです。原田先生のおかげでハワイ大学の日本研究の基礎ができましたし、蔵書構築にご尽力いただきました。

また、原田先生がいらっしゃる時に蔵書の支援をしてくださった渋沢栄一さんという非常に有名な方がいらっしゃいます。その頃のハワイをちょっとご想像していただきたいと思うんですけども、当時は飛行機はなく、ちょっと現在ではお分かりにならないかもしれませんが、人々は船で旅をしていました。日本から北米やヨーロッパに行く時は必ずホノルルに寄らなければならなかったんですね。その頃は日本の要人、指導者や知識者、学者の方とかさまざまな方々がハワイに寄られて、寄港されると1、2か月滞在されてから次の旅先に発つという時代でした。東海岸に行く前にハワイに寄られて、その1、2か月滞在している間に当館の初期の日本語蔵書構築にご尽力いただいたという歴史があります。ハワイは日系移民が非常に多いところですので、地元日系人の方々も、絶対ハワイに日本語の蔵書を作るんだ、という非常に熱い信念に燃えられて、日本からいらした知識者の人たちと力を合わせて当館の日本語コレクションを構築なさったのでした。

わたくしが何をしているかということ、すでに皆さんが非常に詳しく説明してくださったので割愛させていただきますね。それではどういう背景で現在に至っているのかいうことをお話したいと思います。私は大学を出た後、高校の英語の先生をしてました。その時、高校の先生から短大の先生になりたいなあなんて希望を持ちまして、アメリカに留学することにいたしました。留学したのは南イリノイ大学というアメリカ中西部のイリノイ州の僻地にある大学でした。そこで短大の英語の先生になるべく、言語学や第2言語としての英語教育法を勉強しました。ところが人生がコロッとそこで変わって、結婚することになりまして、日本には戻らないことになり、その後中西部から東海岸のワシントンD.C.に転居し、そこでとある私企業の研究所に勤めさせていただくことになりました。そこで何をしていたかということ、アメリカから資料を日本に送る、アメリカの研究者の人達に日本から資料を取り寄せるという仕事をしていて、資料や情報の流通に日米の差があることに非常に興味をもちました。ワシントンD.C.ですから、政府刊行物の資料なども集めていたのですが、日本の政府からの資料がちっとも集まらないんです。アメリカ政府の資料は、資料の流通システムが明確で、どうやって集めるかが分かると、簡単に集められるんですけども、日本の政府関係資料はちっとも集まらないので非常に苦勞し、なんで日米で資料を収集するのにこんなに違いがあるのだろうかとか、日本はどんな仕組みになってるんだろうとか、そういったことを疑問に思うようになってきたんです。そんな時に、私がライブラリーサイエンスの勉強をしたいと上司に伝えましたら、いってらっしゃい、っていう感じで費用を全部払ってくださって、会社がライブラリーサイエンスを取らせてくださったんですね。非常にラッキーでした。私が特別なんじゃないなくて、意志があれば道が開けてくるみたいなところがありました。そこでライブラリーサイエンスの学位を取らせていただいたのですが、そうこうしてい

るうちに外へ飛び出したいくなりまして、大学の図書館で働いてみたいなということで、ワシントンD.C.にある American University of Washington D.C. という私立大学にビジネスライブラリアンとして就職しました。その後夫がハワイに転勤することになり、私のキャリアは終わりだと思ってハワイに行ったんですけども、なんとそこでまた道が開けて今の職に就きました。

江上：ありがとうございました。というような4人の、人に歴史ありという感じの自己紹介ですけど、これを踏まえて次のテーマに行きたいと思います。

利用行動について。アメリカの学生や研究者の利用行動についてご紹介いただくというふうにお願いしております。グッドさんから学生の利用行動、バゼルさんから研究者の利用行動です。

グッド：それではピッツバーグ大学で2013年、14年にやりました学生調査に基づいた資料をご紹介します。実際のオリジナルの資料は70枚ほどのパワーポイントがあるんですけども、これは公開されております(2013年英文オリジナル資料：<http://www.library.pitt.edu/other/files/pdf/assessment/ULS%20FY14%20General%20Survey.pdf>、2014年英文オリジナル資料：<http://www.library.pitt.edu/other/files/pdf/assessment/MyDayAtHillmanSurveyResults.pdf>)。後で興味のある方は見ていただいたり、ダウンロードもできますのでお使いください。それではまず図書館に来る頻度ですけども、毎日来るというのが50%以上となっております。これはこの2012年ぐらいから再び変わってきまして、2007年の頃に私が「情報の科学と技術」という雑誌に、どうやったら学生がもっと図書館に来るかということでいろんな試みをやってる、という論文を書いたんですけども、その頃はピッツバーグの学生がまだあまり図書館に来ないという状況でした。しかし2010年以降学生がどんどん図書館に戻ってきまして、勉強をするようになってます。その中で、図書館の滞在時間というのがあるんですけども、2時間以上というのが半分ぐらい。そして30分から2時間ぐらいというのが44%ぐらいというようになってます。来る時間帯による滞在時間の変化というのはなかったです。次にどういうところで勉強するのかということで、ヒルマン図書館のどこに行きますかということで、一番多いのが1階、44%。見ていると個人使用、個人で勉強しているのが多いと。ここはほとんど長方形、6人掛けのテーブルで、衝立も何もないんですけども、学生みんなそれぞれ間隔を置いてですけども、個人で勉強している学生が一番多かったです。2階が約30%。ここは丸テーブルが多くてグループで勉強する学生も多い状態のフロアーです。3番目がクワイエットフロアーと呼ばれる5階で、衝立のある個人席とさらに自習室があります。うちの図書館は5階建てなんですけれども、

1階2階はかなりうるさいです。自由にしゃべっていいという状況になってまして、上
に上がるほど静かにしなさいという形で使われています。何のために図書館に来ますか
ということで、静かに勉強したい、個人の課題、自分のパソコンを使ってという、個人
で図書館を使うというのがかなり多い、これが55%ぐらいですね。図書館の物を使う、
例えば図書館のコンピューターを使いに来た、図書館の本を探しに来た、講義の資料を
探しに来たという、図書館の資料または図書館の物を使いに来たというのが21%。そし
てグループ活用が12%。というふうに、これは私たちの予想をちょっと裏切りまして、
グループの活用が多いから学生たちが図書館に戻って来たのではないかと当初思ってた
んですけれども、そういうことではなかったということで、新しい資料として我々も注
目しています。

江上：これちょっと興味深いですね。

グッド：はい。そしてその後図書館サービスの使用頻度と認知度を見ても、「よく使う」が「あまり使わない」「使わない／知らない」を上回っているのが、PITTCat+、
これはディスカバリーサービス、うちはSummonを使っているんですけれども、これ
とデータベース、電子ジャーナル、この3つのみが一番使われているし、みんな知って
いるという状況ですね。その他はすべて「あまり使わない」もしくは「知らない」って
いうのが上回っています。さらにEndnoteやMendeleyという書誌の管理ツール、こ
れをインストラクションで教えたりしてるんですけれども、そういったものを無料で使
えとか、そういったこともあまり知らない。そして私たちリエゾンライブラリアン
が一生懸命作っているテーマ別のリブガイドってものがあるんですけれども、こうい
ったものも実は60%以上が「使わない／知らない」という状況になっています。これは私
たちライブラリアンがさらに外に出て学生たちに伝えていかないといけない。できるだ
けクラスに行ってインストラクションしたりして、その時はリブガイドを使って説明し
たりするんですけれども、その後そのリブガイドを使う時はここに来ればなんでもある
よというふうに説明しているんですけれども、なかなか戻ってこないというのが実情だ
というのが、この資料で分かりました。やっぱりもっとマーケティングというのが図書
館に必要であるということが分かってきました。ですけれども、図書館の資料への満足
度というのはかなり高いんですね。比較的最小な高いんですけれども、やはり電子ジャー
ナルの満足度が75%で一番高く、印刷体の雑誌の満足度が58%。ということでデジタル
への依存度がかかなり高いです。それに比べて書籍ではまだ印刷体への満足度は70%で、
電子書籍への満足度が53%ということで、まだまだ本は紙で読みたいという学生も多い
と。まあ53%が電子書籍へと移ってきてますので、少ないわけじゃないんですけれども、

まだ少し印刷体の方が上回っていると思っています。そしてこれは2年前からうちの図書館で始めたんですけども、Twenty Four Five と題しまして、5日間は24時間オープンしています。夜中の11時から午前6時までには図書館を使った学生の割合というのがあるんですけども、週3回以上が30%。中間試験や期末試験の時に使ったというのが16%と、かなり多くの学生が夜中に図書館に来て勉強しています。

江上：近くにお住まいなんですよ、学生さんは。

グッド：そうですね。それはアメリカの大学のひとつの特徴だと思うんですけども、

江上：寮ですか。

グッド：寮もそうですけれども、あとシェアハウス。常に学生向けに貸し出しているシェアハウスのアパートが大学の中や近くはかなりありますし、バスも夜中まで走ってますね。バスで20分30分圏内に住んでいる学生がかなり多いです。ですから、うちの大学はキャンパスというものがしっかりなくて、図書館の隣にバーがあるんですね。バーといっても昼間はご飯も食べれますし、そういう食事をするところもたくさんありますので、夕方食事をしてまた帰ってきてまた勉強する、というかたちがかなり自由にできるというところがあります。そしてもうひとつこれが最後ですけども、スマホやタブレットで研究資料を検索したことがあるかということで、トータルで約40%の学生がもうスマホで資料を検索しているという結果が出ています。これによって図書館のOPACやもとの図書館のホームページもスマホ対応でないと学生たちは使わないということが分かってきています。ここが最後ですけども、2013年のWebのオリジナルの資料がこのURL（前掲）にありますので、ご興味のある方はご覧ください。（パワーポイント <https://www.slideshare.net/hirogood/ss-63590400>）。

江上：では続きましてハワイのバゼル山本登紀子さんから、研究者の利用行動についてご説明いただきます。

バゼル：それでは今、学生さんの行動についてグッドさんの方からお話がありましたので、今度は米国の研究者の図書館利用状況という調査がありますので、そこらご説明したいと思います。Ithaka S+R という米国の非営利団体が、2000年から3年ごとに米国の高等教育機関の研究者を対象に調査をしています。時系列にどうい変化があるかを見ることができます。情報テクノロジーの変化による研究行動の変化とか、情

報活用のインパクトっていうんですかね、そういったことを調査しようとして始めたものようです。ちょうどこの4月に2015年の「調査結果 (<http://www.sr.ithaka.org/publications/ithaka-sr-us-faculty-survey-2015/>)」が出ましたので、そこから抜粋して皆さんと共有したいと思ってます。この URL (<http://www.sr.ithaka.org/>) に行けば、全部の調査報告を見ることが出来ます。

まず最初の質問です。この質問は2003年からずっと継続して調査しているものです。「研究の出発点つまり starting points は一体どこから始めますか？」という質問ですね。まず2015年の所を見ていただくと、ブルーの線を見ると2003年の頃から「図書館の中でリサーチを始める」という研究者の数がどんどんどんどん下降線になっていて研究者は図書館に来てリサーチを始めるのではないという結果が、はっきり表れていますね。ところが今回の調査結果で非常に面白かったのは、今まで下降してきていた「図書館のウェブや目録」にまず最初にあたってから研究を始める、始めているというのがこの赤の線なんですけれども、(2015年に) 初めて上回ったんですよ。これは今までずっと下降線をたどっていて、ダメかなと思っていたのが、ようやくここで上がったのです。それは、もしかしたらディスカバリーツール discovery tool を開発したいと思う図書館側が、より良いウェブ上の検索ツールや目録などを作り始めて、提供し始めてきた。で、使ってみたら、やぁこれは便利で使えるじゃない、と思ってくださる研究者の方が増えてきたんじゃないか、と見られています。希望の光がさしてきましたね。ただ図書館に来館して研究を始める、という方法は、終わりを告げたと見ても良いんでしょうかしらね？ どうでしょう。研究の出発点の変化を、これを学問別に見ると、またちょっと違いが見えてきますね。Humanities というのは人文ですね。人文の研究者をみると、特定の電子ツールとかデータベースを使うというのと比べて、図書館のウェブや目録から研究を始めるという割合が、やっぱり、ちょっと多くなってきてますね。ところがだんだんだんだんそれが Science 系にいくと、図書館のウェブや目録を使うというよりは、特定の電子ツールやデータベースから先に入る、そこから自分の研究を始めるという研究者が多いことが分かりますから、やはり分野別にかなりの違いが出ているのが分かります。

江上：3番目の Science っていうのはいわゆる理系ですか。

バゼル：理系です。Medical というのは医学ですから、人文系の方はまだかなり図書館の目録やウェブを使ってくださってるわけですね。ただ一般のサーチエンジンも結構多いですね。

次が「学術論文や書籍を探す時どこから始めますか?」、つまり特定の論文や書籍を

探すときはどこからですか?という調査の結果がこれです。これで分かりますように、やはり特定の学術データベースを常に使う、Google Scholarを使う、というのがかなり多くなってきており、20%が図書館のwebやカタログから入る、そこから見つけるという傾向になって来ています。悲しいかな、ライブラリアンに聞くというのが2%あるかないかですから、ここからも時代が変わって来てるとというのが分かりますね。次は「学術論文や書籍を探すときどこから始めますか?」の質問への結果が学問分野別で出ています。ここでも Humanities、人文と、それから社会科学系と、科学と、医学系ではかなり利用の仕方が違ってきていることが分かりますね。ここでもライブラリアンに聞く、というのは低くなってきています。

次はアクセスの件について、「自分の大学図書館が印刷物の学術誌購読をキャンセルして電子版を購読してもかまわない」、こういうことを聞かれた時に賛成か反対か、というのを調査したものです。これは学問別になっていますけれども、「キャンセルしても良いよ」という研究者がかなり多くなってきて、医学部ですと80%以上が「冊子体の物はキャンセルしても良いよ」と思っているようです。ただ人文系は「まだ冊子体では是非見たい」と言う研究者が多い。

江上：でもキャンセルしていい人が、人文系でも5割はもう超えているんですね

バゼル：そうですね。超えていますね。そして次は、「電子版学術誌っていうのがうまく機能しているとしてじゃあそれを書籍に考えてみた時、冊子体の蔵書を全部破棄して電子版に変えてもかまわない」という文章に対して、賛成か賛成じゃないかの調査結果がここに出ています。全体的には低いですが、人文系でも以前は絶対にそんなことしてもらっちゃ困るという人が多かったんですが、徐々に賛成、つまり容認する人の割合が増えては来ます。まだそれでも30%ぐらいですけども、それでも増えて来ている。ただ全体から見れば社会科学系、医学系と比べれば、人文系の研究者には冊子体を大切にしているようですね。

次は「冊子体学術書籍対 e-books」の分野別の傾向です。最初は「学術電子書籍は研究と教育に重要な役割をしている」と考えている人達の割合が学問別に示されています。それから次には「冊子体学術書籍が研究者と教育に重要な役割をしている」と考えている人達の学問別の割合がでています。時間がないので端折ります。

これは、「電子書籍対冊子体書籍」で「この5年間に研究者・学生の電子書籍、つまり e-books の利用が増え続け、冊子体の書籍の図書館蔵書を維持する必要がなくなるだろうか?」という質問に対する、賛成か反対かという調査なんですけれども、「この5年間に無くなる」と見ているのはやっぱりこの×印は医学系なんですけれども、ここ

ぐらい(30%強)にあって、あとの20%の分野(社会科学・科学)は「5年間の間に無くなるんじゃないか」と見ている方々が多く、人文系は10%ぐらいが「もしかしたら5年間に無くなるかも」と考えていらっしやるようです。

実は1年ほど前に、図書館のアジアコレクション部から本校ハワイ大学のアジア研究をしていらっしやる先生方に質問したことがあります。それは、先ほどちょっと話が出ました、利用者の方が自分でクリックして図書館に本を買ってもらうというシステムを、うちでも導入するか導入しないかという議論があったものですから、アジア関係の学者さんたちは電子ブックについてどう思ってるかなというのを調査してみたんです。その調査結果によって、利用者が選書を決定できるシステムの導入に踏み込むかどうかを決めたいと思ったわけです。「電子書籍と冊子体を選択できる時はどちらを利用したいですか?」とお聞きした時に「絶対 e-books の方が良い」と言われてる方が15%くらい、それから「やっぱり冊子体が良いや」と言ってる方達が40%くらい、そして「どっちでも良い」とすごくフレキシブルな、柔軟な方達がこのくらい(20%弱)あったんです。もっと詳しく聞いてみると、先生方は e-books を使い分けていらっしやることがわかりました。ご自分がじっくり研究したいときは e-books は嫌だという人が多かったんです。ところが学生さんを教えたり、または1つの単語とか文を探したり検索したりするには e-books が良い。でもじっくり研究するのはやっぱり冊子体が良いと言われるが多く、どっちかっていうとだからこそ「e-books と冊子体の両方を購入して欲しい」というご意見でした。

また Ithaka の調査結果にもどりますが、図書館の役割についてのことで、「図書館の役割・サービスでどの役割とかサービスが重要だと思いますか?」という質問に対しての回答がこれです。Gateway の役割がブルーの線です。こちらは、Buyer としての役割、いわゆる「図書館は必要なリソースや、学術誌や学術書籍、データベースなどを購入してくれる所」という役割が一番皆さんに重要だと思われるようです。2012年にはちょっと下がったんですが今(2015年)はこの程度(約85%)という感じになっていますね。そして黒は Archives の役割で「いろいろなリソースのリポジトリとしての役割」というのを次に皆さん見ていらっしやるようです。次が「リサーチのサポート、研究活動に対するサポートを図書館がしてくれる役割」が重要だと思っている方がこちらですが、今はちょっと上がって来てますね。そして「Undergraduate のサポート、学部生に対してのサポート、例えば情報リテラシーなどのサポートを図書館にしてもらいたい」と思っている研究者が今回かなり上がっているというのが分かってきました。こちらは分野別に見た結果です。同じ質問を分野別に見た物です。

今回加わった新しい質問があります。それは図書館には data curation とか data management とか data preservation、そういった役割をしてもらいたい。そういう

のが重要だと思っている方がどのくらいいるかという質問です。これは図書館側が「それは私たちの新しい役割である」と言い始めており、最近流行っている役割です。図書館側から見ると、これを前面に出して、図書館は data curation も出来ます、data management も出来る、data archiving も出来る、data preservation も出来るんだと、宣伝しているんですけども、研究者たちは実際には90%の方が「そんな、図書館とかそういう第三者に任せるのではなく、自分で管理して、自分で自由にアクセスし、操作したい」という self-reliance を主張しています。でも図書館側はかなりアピールしているんですが、図書館と研究者が思っていることとのギャップがかなりここに出ています。

江上：data curation やるより、学部生のサポートやって欲しいと。

バゼル：やって欲しい。はい、その通り。さて、私が来る前に調度この調査の英国バージョンっていうのが出ました。もし興味のある方は英国ではどうなのかな？というのをご覧になると面白いかもしれません。

江上：ありがとうございました。いまのグッドさんやバゼルさんのプレゼンに対してご質問のある方は、配布しているコメント票に書いて下さい。このあとで田中さんにプレゼンしていただいて、そのあと回収したいと思いますので、是非書きこんで下さい。

では今お2人から利用行動についてのアメリカの現状のご紹介をいただきましたけれど、今度は学生の様子について田中あずささんに、これは日本人留学生の様子ですかね、ご紹介いただきたいと思います。

田中：私からは日本人留学生の様子と、それに対する図書館の提供するサポートについてお話ししたいと思います。まず日本人の留学生の数について、ちょっとお話ししたいと思いますんですが、これは University of Washington の例になりますけれども、2010年から2014年までの統計がありましたので出してみました。左側が日本、そして比較するのによいかなと思って右側に中国からの留学生の数の推移を出しています。下から順に年が新しくなっていきます。そして左から順に学生の数があります。ブルーは学部生、そしてオレンジは大学院生という意味なんですけれども、日本から来る学生は全部で150人行くか行かないかっていうのが、2014年の統計でした。それに対して中国からの留学生はもう桁が変わって3000人ですね。3000人ほど2014年は入学して来ました。これは、ごめんなさい、入学ではなくて在籍数なんで、交換留学の数も入っています。ですから学部生にはですね、日本のいくつかの大学と University of Washington が提携

しているので、そちらから来ている学生さん達がかかり入っています。ほぼ学部生はそうですね。70人くらいは来ているのでそんな感じになります。そして一応念のためにですね、情報として台湾と韓国もちょっと出してみました。台湾が400人程度2014年はいました。そして韓国が600人と。

江上：だいぶ違いますね。

田中：そうですね。という数字でした。それで、このですね、統計で2008年と2014年のもので各国から来ている留学生のランキング、数字のランキングを出してきたんですけども、上が2008年、下が2014年でした。2008年も実は1位は中国からが多かったんですね、桁は3桁ですけども674人でした。そして日本は6位、143人。今とほとんど変わらなかった。そして2014年はこれもかなり桁が上がったんですが、やはり1位が中国で、日本は6位でした。日本からの留学生が減っていつているのかなと思ったんですが、実はほとんど数も変わらず、ランキングも変わってなかったということがわかったんですね。たぶん日本からの留学生が減っているという印象を受けたのは、おそらく中国からの留学生がどんと増えたので、その、

不明：相対的についてということですね。

田中：相対的に、割合としてちょっと減ったように見えたのかなと思いました。そしてこのような数字で日本からやってくる留学生に対しての、図書館からのサポートについてなんですけれども、ほとんどの留学生の方々は9月入学が多いです。そして9月にこの写真の、留学生に対するオリエンテーションの写真なんですけれども、留学生がアメリカの大学で生活を始めるにあたっていろいろな情報を提供するオリエンテーションがありまして、その中で1時間、外国語で図書館の使い方を紹介するオリエンテーションをしています。で、今行っているのは中国語、韓国語、日本語だと思んですけども、その中の日本語のセッションを私は担当しているんですけども、その時に使っているスライドをいくつか紹介しようと思ったんですが、ちょっと時間も少ないですので割愛します。

それから日本人の留学生が現地に行ってどんな勉強をしているか、こちらにちょっと比重を置いてお話ししようと思うんですけども、これはですね、日本の歴史の授業の実際のシラバスでして、その先生に許可を得て、ちょっとコピーを見せさせていただくことにしました。これは1行目ですがタイトルがあって Modern Japan の歴史ですね、徳川時代からさらに現代までの日本の歴史、その中のポップカルチャーについて

て注目した授業です。このシラバスを見て、まず最初に授業の内容が載ってまして、そのあとこの授業で使う教科書が5つ並んでいます。それから大きな比重を占めるのが課題のページになります。まず30%、自分の成績の30%がこれで決まるよってというのが、課題図書を読んで、その課題図書に関して考察を1-2ページまとめて毎週持ってくるように。これがまず1つ目の課題です。それから次、Class Presentation (10%)、これがですね、課題図書を考察してみんな持ってくるんですけども、その時のディスカッションのファシリテートを担当する。これは1人1回、1学期の中で担当することになるんですけども、

江上：すいません。ファシリテーションっていうと、

田中：あの、ディスカッションの、

江上：私がやっているように。

田中：そうです。司会者ですね。そうです。それを15分間で「今週はこれを読みましたね、あなたは何を考えましたか？ 私はこんなことを考えました。こんな質問を思ったんだけど、あなたはどう思いますか？」、そういう司会を、

江上：発表するだけじゃなくて、こういう“まわし”をやれという課題なんですね。

田中：はい。それが10%です。そして次の10%は、この授業は期末レポートを提出するようにと定められた授業なんですけれども、その期末レポートを出す前にまずプロポーザルを、先生に許可を得ないといけないので、それをまず出してください。それが10%ですね。そして実際の期末レポートを提出することと、そのレポートの内容を発表するよってというのが全部で25%、成績の割合の比重として与えられています。そして最後に25%、これは出席になります。これはですね、出席して授業に行っていればいいというだけではなくて、active participation と書いてありまして、ディスカッションを毎週やりますが、それに参加しなくてはいけない。そして、ディスカッションに参加するにもちゃんと文献を読んできて、周りのクラスメイトに役に立つような質問をしたり、コメントをしたりということが求められるようになっていきます。それから面白いんですけども、携帯電話を切っておくこと、これ携帯電話を鳴らすと出席は無しということで厳しいクラスだったようです。そして最後にこれはどうでしょう？ 日本のシラバスとちょっと違うんでしょうか？ 評価方法ってというのが非常に細かく計算方法が書かれていて、こ

れまでパーセンテージ、割合がレポート出して、レポートが何点だったら何%という風に挙げてあったんですけれども、その中で例えば全体の合計が94%～100%だとA取れますよ、93%～90%だとAマイナスですと、細かく決まっていて、こういうシラバスを書くことで、学生と先生との争いを避けることも出来るのかなと思うんですけれども。このような厳しい授業を日本から来る留学生もアメリカ人に混じって受けています。

それで、そうした留学生だけではないんですけれども、もちろんアメリカ人の学生に対しても行う図書館からのサービスっていうことをちょっとお話ししますと、まず私がやっていて、他の皆さんもおそらく同じことだと思いますが、学期の最初の授業に出張に行きます。で、私はこうやって、日本研究の授業に関係しているので、レポートや宿題が出て分からないことがあったら図書館に来てください、という自己紹介と、あと資料の紹介。それから先程グッドさんがおっしゃってたリブガイドの紹介をしたりします。それから先程歴史の授業にも出てきたんですけれども、これはレポートの提出が必要な授業でした。そういった時にレポートのアイデアを一緒に考えるのも私たちの仕事です。すでに研究がかなり行われていて、ちゃんと資料が揃うようなテーマをレポート用に選んであげる、一緒に考えるっていうようなことですか、そうですね、あと引用の仕方、授業ごとに、先生ごとにこの引用方法でレポートを書きなさいというふうに指定しているので、その方法を一緒に考えたりですか、手直ししたりとかもします。それからもちろん資料探しをアシストするのも私たちの仕事になります。それから、サブジェクトライブラリアンが出来ることももちろんあるんですけれども、図書館が提供しているサービスとして、例えばリサーチコモンズ、これ先程お話ししたリサーチコモンズを紹介したりですか、あとはライティングセンターですね。レポートの書き方を教えてくれるライティングセンターがありますよっていう情報を提供することもあります。

それからこれは私が提供しているサービスのひとつなんですけれども、Japanologists colloquium と言うのを月に1度東アジア図書館で行っています。これは日本をテーマに研究をしている学生で、学部を問わず、例えば美術学部で日本庭園の研究をしているとか、音楽学部で雅楽の研究をしているといったような、日本をテーマにして研究している学生をひと所に毎月集めて、彼らの研究について例えばブレインストームをしたりですか、発表の練習をしてもらったりとか、あと卒論のディフェンスの練習をもらったり、そういう場として使ってもらっています。このようにすることで学部を越えていろいろな学部からのアイデアが集まってきたりですか、例えば文学部でいつも文学を研究していて、文学部のクラスメイトからはいろいろな質問を受けたりアドバイスをもらうだけけれども、この会に来ると例えば日本のビジネスを勉強している参加者から「その文学の研究をしているようだけど、これはどういう意味だ？」とか思いがけない質問を受けたりして、なかなか役に立っていると好評なので、頑張ってるよ

うにしています。こういう場所を提供することで、そうですね、日本人の留学生の皆さんの研究の発表の練習の場にさせていただいたりということもしています。というわけです。

江上：ありがとうございます。田中さんによる日本人留学生の様子というお話でした。このタイミングで質問票を回収させていただきたいと思います。

今田中さんからご紹介ありましたような、日本から海外の大学に留学している人たちの様子とか、海外に留学する方法について書いた本を、最近紀伊國屋書店の三竹さんという営業の方が出版しました。その本がこちらにございます。『世界の大学をめざせ！アメリカのスーパーエリート校入門』という本ですので、もしよろしければ皆さんこれを参考にさせていただけたらと思います。

それではハーバードのマクヴェイさんに、今度は日本人留学生ではなくて、現地の学生の学習の様子とか授業の様子についてちょっとおうかがいしたいなと思うんですけど、いかがでしょうか？

マクヴェイ：はい。学生と言っても、私達が普段接しているのはほとんどいわゆる大学院生が多いんですね。それで急遽その辺にいる学部生をちょっと捕まえてランダムにインタビューしてきたんですが。

江上：ありがとうございます

マクヴェイ：ランダムだったばかりに3人だったんですけど、みんなアメリカでいうとSTEM (STEM) っていうんですけど Science and Technology and Engineering and Mathematics っていうんですけどほとんど全員理科系だったんです。で、それでも学部生の場合はいわゆる一般教養・ジェネエド (General Education) っていうのがありますから、一応その中で基本的な論文を書くというプログラムが全員必修となっています。その論文を書く時に、必ずライブラリーの資料を1個使うことっていうのが必要条件としてあるので、それでライブラリーを使った、っていうのが彼らの図書館利用経験をたずねた時の返答でした。ただやっぱりグッドさんがおっしゃったように、場としてのライブラリーは非常に好評で、3人とも理系の学生ですけどいつもライブラリーで勉強しているとか、あと勉強の場所としてよく使うのは、学部生は全員寮生なので、自分の寮のダイニングホールで食事の後そこで勉強することがとてもよくある、という話でしたね。それでやはりグループ学習というよりは、私が聞いた学部生は1人で自分の宿題とかいろいろ勉強するのに使うんだけれども、その時にも個室の方が空いていればそっちを

好むという話でした。だから、常に大テーブル好むっていうのはちょっと違いました。でも基本は場としての図書館の価値がとても大きな地位を占めてるという感じは、その非常に少ないサンプルの3人の学生からのインタビューでは実感しました。あとは大学院生のほうは、私たちが接しているのは本当に日本研究っていう日本中心の人文系の人たちなので、やっぱり図書館は使うことは使います。それでも最近、これは私自身がいつも思ってる大きな問いなんですけど、21世紀においてブラウジングはどういう意味を持つのかっていう。ブラウジングっていうのは要するに書庫に行っているいろいろな本を見るっていうことですね。アメリカのアカデミックライブラリーでは基本的にオープンスタックって言って要するに開架式で、その開架式の趣旨はブラウジングがいかにかに研究に大事かっていうことからそもそも来てるんだと思うんです。それがさっきの登紀子さんの発表でもあったように、研究の出発点としてブラウジングがほとんど無いっていうのがもう現状だっていう認識になってきましたので、やっぱり学部生は場としての図書館。大学院生も場としての図書館が大きいんですけども、あとは日本研究っていう特殊性でプリントベースの資料が中心っていうのもあって、図書館が使われているかなと感じます。

江上：ありがとうございます。やっぱり学生のあり方は日本とアメリカで結構違う所があるんですか？

マクヴェイ：違うというか、日本でも同じかもしれないんですけども、いわゆる期待値が違うっていう感じです。その3人の学生なんか話してみても、じゃあペーパーを書かなければいけない時に必要な資料が無かったらどうするの？って聞いたら、大抵のことはオンラインで解決が付くって言うんです。つまり図書館まで足を運ぶほどのことは、今まで一度も無いっていう話です。図書館の書庫に無くて遠隔倉庫にあるものはオンラインで「このページから3章コピーしてほしい」というようなリクエストすると翌日PDFでユーザーに送られてくるという、スキャンアンドデリバーと言うサービスは、今とても人気があるサービスです。教授や大学院生などはやはりそれをかなり活用していて、研究の生産性を高めるのに役立つのかと自負しているのですが、学部生になるとそれも待てないっていう感じらしいんです。インスタントなアクセスっていうのは、強固な期待として学部生は基本的に持っているなと感じました。理系と文系の違いもあるかも知れませんが。

江上：はい。ありがとうございます。そういった意味で言うと、フロアの方から皆さんへという質問で、日本の電子書籍はどういうプラットフォームで使っているんですか？

またどういうプラットフォームの電子書籍を購入してるんですか?というご質問が出ていますけども、どういうものを使ってらっしゃるんですかね。

マクヴェイ：ハーバードの場合は NetLibrary というのを使っています。購入したのはすでにプリントで所蔵している「国史大系」です。要するに本文検索ができるっていう、その機能が大事なので使っています。

グッド：うちも NetLibrary です。先ほど言った200冊くらい最初買った中には『現代史資料』、これもやはりうちも印刷体持っているんですけども、本文検索ができるという事で購入したのがあります。

田中：そうですね。University of Washington の場合は今いろいろな所で電子図書の購入のパイロットを始めているんですけども、まず初めに丸善 eBook、それから EBSCO もちょっと始めているんですけども、まずこういった購入についてのベンダーとの、関係の establishment が必要になるので、なかなか新しいベンダーの方と取引をするっていうのはちょっと時間がかかるので、トライしているところです。

バゼル：ハワイ大学では、先程もちょっと調査をご紹介しましたが、あまり先生方のほうが e-book について積極的ではなかったんですね。ですから今のところ研究に関する e-book っていうのは積極的に買ってない状況です。ただ何ていうんでしたっけ、extensive reading っていうんでしたっけ、多読法で日本語を勉強なさってる人たちが多読するための本というのがあるんですけども、それは図書館に冊子体を入れるんじゃなくて e-book の方が使いやすいということで、丸善の eBook でその多読用の資料の本は購入し始めました。

江上：はい。ありがとうございます。今のお話の関連で、受付でお配りしたこのA4の紙があると思います。これはですね「Major Japanese E-Resources Worldwide」、日本の電子リソースが海外でどのくらい契約数があるかということが示された表です。これも紀伊國屋書店の方が作られた表なんですけれども、そこに書いていますように、そうですね JapanKnowledge とか聞蔵ですとか CiNii、それから e-book もそうなんですけれども、NetLibrary とか、それから Japanknowledge の群書類従とか太陽とかいうものが、これだけ海外でも契約されてるよというような統計をとったものです。参照していただければいいかなと思います。

グッド：単体の電子書籍が購入できるのは今海外ではEBSCOとNetLibrary、これは紀伊國屋さんが日本側から選書したものが出ていると思いますけれども、それと丸善さんだと思います。ですけどこの表にあるようにJapanKnowledgeを通していろんなe-books、例えば30冊のマルチボリュームのものだったり、あとは太陽とかそういう大きなセットで購入するというかたちのものですね。

江上：それからもうひとつ電子資料についてこんな質問が来てるんですけども、私は人文系なので書籍を印刷して利用することが多いんですが、ジャーナルなり書籍なりがほぼ電子になった場合、複写利用は楽になりそうな半面、それが著作権違反しないような措置が必要になるんじゃないかなと思います、いかがですか、っていうふうに書いてあるんですが、これは多分日本とアメリカでだいぶ著作権に関する事情が違うんですね。

グッド：アメリカではフェアユースっていうのがあって、教育方面で使うということでは緩やかな使用が認められています。大学図書館の中にはスキャナーも置いてありまして、自由に本をスキャンして自分のiPadなりなんなりに取り込むこともできますし、雑誌もインターライブラリーローンでリクエストしても全てPDFで送れます。通常ですとそれを第三者に渡してはいけないというかたちにはなってますけど、はっきり言ってそこをコントロールすることは出来ない。あくまで教育のための使用であれば、そこへんは緩やかにしているというのが、アメリカでの図書館の理解だと思います。

マクヴェイ：でも一応、一筆っていうか、個人の責任によりスキャンしてくださいっていうふうに掲示がありますよね。図書館は責任を取りませんっていう一線は引いてあるようです。

江上：ありがとうございます。それからどんどん行きますね。古賀崇さん、研究者の方からのコメントですけども、日本のデジタルアーカイブ、これは無料でも有料でも可って書いてありますけど、日本のデジタルアーカイブの使い勝手ってどうですかと、日本のデジタルアーカイブにどんなことを希望しますかと、というようなことを書いてますけれど、感想程度でも結構ですのでいかにでしょうか？ 実はこのシンポジウムをやる前に、午前中に志高館の方で行われているAASっていうアジア学会の大会の方でラウンドテーブルというものが行われまして、そのパネリストにマクヴェイさんとバゼルさんも出ていただいていたんですけども、そこでかなり日本のデジタルアーカイブとか、アメリカで作ってるデジタルアーカイブの様子とかっていうのをご紹介いただいたんです

けど、利用者の立場として日本のデジタルアーカイブ、国会図書館のデジタルアーカイブなり、私がある国際日本文化研究センターもデジタルアーカイブ作ってますけれど、そういったものの使い勝手、ここをこうした方がいいんじゃないとか、ここをもうちょっとこうしてほしいとかいうようなことを、午前中の繰り返しになっても結構ですので、何かコメントいただければと思います。

マクヴェイ：午前中の繰り返しになる可能性がありますけれども、やっぱりそれこそ日文研なんかものすごくいいデジタルコンテンツなのに、本当に隠れてるんですね。その辺が、すぐれたコンテンツの活用のためにも改善されるといいですね。

江上：よく言われるビジビリティですか。

マクヴェイ：ビジビリティ (visibility)、あるいはファインダビリティ (findability) ともいわれる「見つけやすさ」が、デジタルコンテンツの活用の鍵を握っていますね。

江上：例えば国際日本文化研究センターが出しているデジタルアーカイブは、国際日本文化研究センターのウェブサイトまで来て、クリック、クリックしたら見れるけども、一般の海外の人たちが普通に web 上で使っているところに出ていかないと、というのがおそらく非常に難しいというか、解決していかなきゃいけないポイントかなというふうに思います。私がしゃべってもしょうがないんですけど。

マクヴェイ：それこそ、メタデータを公開しディスカバリーツールで見つかるようにするっていうのが、私たちから見れば合理的な気がします。

江上：先程グッドさんのお話にも、ディスカバリーツールの使われ方っていうのがだいぶ高かったというような紹介がありましたし。

グッド：そうですね。

江上：それからもっといろんな質問が来てますけれども、グッドさんのプレゼンに対する質問なんですけども、ピッツバーグで2010年以降学生が図書館に戻った大きな理由は何ですか？ 何かやったんですか？っていう質問があるんですけども。

グッド：それがですね。よく分からないんです。我々はまず、グループスタディが増え

たんじゃないかと、授業のやり方も、特に学部生なんですけど、グループでの研究発表とかそういうのが増えてきたので、そのたびに皆が図書館に集まって勉強してるんじゃないか？ そういうことで、グループスタディルームを増やしたり、そこにパソコンがつながる大きなスクリーンをつけたりしてるんですけども、実際には個室も個人の勉強部屋として使っている方をよく見受けれます。2013年に学生に「図書館に対する要望は何ですか？」っていう調査をしたんですけど、一番の要望が「もっと勉強スペースを作ってくれ」と、確かに期末試験とかになると、床で勉強している学生も多かったんですね。もうひとつは「開館時間を増やしてくれ」ということだったので、2014年からまずスペースをどんどん増やしまして、図書館を広げるわけにもいかないので、本をどんどん倉庫に送ってスペースを増やしてます。例えば東アジア図書館は3階フロアをすべて使ってるんですけども、もともとあった雑誌のスペースを全て勉強スペースにしました。未製本雑誌は古い製本雑誌と一緒に本棚に入れると。それと、参考図書も半分に減らしてそこを今机にしています。さらに本棚を半分にしてほしいと上の方から言われてまして、実質もうすでに東アジア図書館のコレクションの3分の1しか図書館にはないんですけど、それをさらに半分に減らして、倉庫に送ってそこをスペースにするというふうに、スペースをまず増やしてくれと。

スペースを増やすとどんどん学生が増えてきます。あと時間を増やす。先程言ったTwenty Four Five (24時間/5日)で、開館時間を増やすと夜中でもずっと勉強している学生がいると。その2つが、学生が増えていく要因だと思います。

江上：開館時間増やせば確かにニーズは増えるかなという感じはありますね。今まで無かったニーズを掘り当てたっていう感じですね。

グッド：そうですね。

江上：ありがとうございます。それから今度は田中あずささんへのご質問なんですけれども、ワシントン大学は利用者の多様性を重視しているとのことですが、その具体的な支援例なんかを教えてくださいませんか？という。例えばさまざまなジェンダーの人とか障害者がいらっしゃるということで、どんな具体的な支援を行っていらっしゃるかっていうのをお聞かせくださいというようなご質問ですけど。

田中：はい。ありがとうございます、質問を。多様性について図書館が対応している面と何か具体的な例はあるかということだと思うんですけども、例えばですね、ジェンダーに関していろいろなジェンダーの方がいらっしゃるっていう、まずアウェアネスを

ライブラリアンが持った方がいいんじゃないか、という取り組みがありまして、図書館員に対して開かれたワークショップがあったんですが、これがどういうものかと言いますと、safer place っていうワークショップなんですけども、このライブラリアンの所に行けば自分のアイデンティティについて safe、安全に心地よく話すことができるっていう certificate をもらえるというワークショップがあったんですね。これはキャンパスの中のキューセンター、キューは queer のキューですけども、ジェンダーに関して、アイデンティティに関して教育を行っているセンターがキャンパスにあるんですが、そこが大学職員に対してもこういうワークショップをしまして、そういった利用者が来た時に、図書館に来て、何ていうか、相談室っていうか、自分のアイデンティティについて相談しに来る学生が、今後どれくらいいるのかちょっと分かりませんが、もしかして授業で何か差別を受けたりとか、先生にも話せない、アドバイザーにも話せないけど、図書館にそういう safer place っていう所があってライブラリアンに話を聞いてもらえる、っていう仕組みを作るようにして、ワークショップに参加して certificate をもらいまして、私のオフィスの扉のところにも safer place と書いてあるので、ジェンダーに限らず、何か自分のアイデンティティについて話したい学生なり個人がいれば来てもらえる、っていう取り組みはしています。

江上：ありがとうございます。それからバゼルさんの方にもご質問きてます。「大学図書館の役割、研究者から求められていることが、アンケートで大きく変化しているというふうに思いましたが、それに対して図書館員の意識というのは変化しているのでしょうか」。つまり研究者が、例えば学部生への指導を図書館に求めていることだと考えているのに対して、ライブラリアンも学部生に対して指導していくべきなんだというふうに今考えているのかどうか。

バゼル：それは大学全体がやはり under-graduate、学部生の教育に力を入れたいという方向にきているんですね、ハワイ大学の場合ですけど、他の大学もたぶんそうだと思います。以前は、私達のように高等研究機関だと、院生とかそれこそ博士課程の方々に焦点を当てていた時期もあったんですけども、今は学部生に対して大学もきちっと教育に重点を置くべきだと、いう傾向が図書館にもきて、図書館も学部生の人たちの教育にしっかりした支援をしなければいけないという意識構造に変わって来ていると思います。

ちょっとそれに加えてなんですけど、何回か先生方が院生に対してセミナーをやっているクラスに座らせていただいたりしたことがあるんですね。その時に先生方の教え方というのも最近変わって来ていらして、先生方がいろんな資料を先に搜してしまっ

それをオンライン上で討論するようなシステムがあるんですけども、そこに全部その資料の URL を載せてるのです。その先生方の考え方としては、そういった資料を探すのは時間をかけないで、討論に時間をかけたいとか、アナリシス・分析に時間をかけたので先に資料を提供しちゃってたんですね。学生にとっては簡単ですよ。そこをクリックすれば資料を読めるわけですから。それでその先生に、「まず学生に資料を探させるところも、先生の授業に入れていただけませんか」って、お願いしたんですね。そしたら「なるほど、そうだね」とおっしゃられて、そこで先生に変えていただいて、探すというところも授業の中に入れていただいたら、どーっと学生が図書館に来たんですよ。ですからライブラリアンと教えておられる先生で、ホームワークなり資料探しもシラバスに入れていただきたい、という意味疎通をお互いにして授業の中に入れてもらうことが大切だな、と思いました。

江上：ありがとうございます。ごめんなさい、時間過ぎてますけれど、もうちょっとだけ続けさせていただきますね。実際に海外でライブラリアンとして働きたいと思ってる方も何人かこの中にいらっしゃいますよね、こんな質問もきてるんですよ。「パネリストの方々が、学生時代からライブラリアンを目指していたというよりも、転職された方が多いという印象を受けましたけれども、そのように転職してライブラリアンになる方法は多いのでしょうか」。というより、多分転職自体が多いんですよ、アメリカは日本と違って。どうですかね、アメリカでライブラリアンに具体的になる方法として、こんな方法があるよとか、こんな道があるよとか、こんな就職口あるよというようなお話を。

田中：転職自体多いというのは確かにそうなんですけど、ライブラリアンという職が、特にサブジェクトライブラリアンになりますと、ひとつ自分の強みのあるサブジェクトっていうものを持っていないといけない。MLIS (Master of Library and Information Science、図書館情報学修士号) の他にも。例えば同僚にいますのは、法学、ローライブラリアンで、弁護士さんだったんだけど裁判をやっているのがいやになったんだと、研究調査したりそういう調査をサポートするのが好きだというので、弁護士をやめて MLIS を取りに行ったりということがあります。それから私が最近見る傾向は、ティーチングが出来るライブラリアンていうのが必要とされているようで、高校の先生から転職した人や、それからやはりデジタル化、デジタルキューレーションていうのも強くしていかなくてはならないと私たちは考えていたので、IT に強い人、そういう畑からやってくる人達もいるように思います。

グッド：私のところでアルバイトをしていた学生が、アートライブラリアンになりたいというふうに言ってまして、最初に MLIS を取ってライブラリアンになって、その後アートヒストリーのマスターを取っていききたい、という話をしてたんですけども、まず日本人がアメリカで MLIS を取っただけではなかなかライブラリアンにはなれません。やはりひとつの、今田中さんが言ったように、専門分野を持っていないと難しいと思います。私の場合は MLIS を取る前にアジア学のマスターを取ってました。実は中国研究が専門でして、日本研究というのは学問的には勉強したことがないんですけども、それを取った後に MLIS を取って、その2つのマスターを持ったうえでアプライをして今の仕事を果たしたという感じです。今うちの大学では、ハワイと違って MLIS を持っていなくてもライブラリアンになれます。特に IT 関係が強いライブラリアンを求めていますので、そういう IT のマスターとか知識を持っている人たちもどんどん入ってますし、日本研究のライブラリアンでは今、博士号を持ったアメリカ人の方々が日本研究のライブラリアンになる傾向が多いです。今まで見るとやはり、最初は日本語・日本文化をまず知っているのが日本研究ライブラリアンの最低条件みたいなことがあったんですけども、今は逆に言葉は後からついてくると、日本研究の仕方をしっかり博士号までいって勉強したような人が日本研究のライブラリアンとして学生達のサポートができるんじゃないかという考え方が増えてます。MLIS に関してもなってからでもいいという感じで、最近スタンフォードで日本研究司書になった方も日本研究の博士号は持っていますけれども、MLIS は持たないで、入った後で近くの UC バークレイのライブラリアンに MLIS のそういった実務を教えてもらって仕事を始めた、というふうに聞いてます。

江上：そういった意味でライブラリアンに求められていることが今までとは変わってるし、専門化してたり、高度化してたり、複雑化してたりっていうことですね。はい。ありがとうございました。

本当にもっと時間があれば、皆さんの質問ご紹介したかったですし、できればやりとりもしたかったんですけど、ちょっとお時間がなくなってきましたので、この辺でそろそろまとめに入らせていただこうかと思えますけど。今、グッドさんに言っていただいたように、ライブラリアンにいろんなものを求められるようになってきているということ踏まえた上でですね、今後我々ライブラリアンとして、あるいは図書館、大学図書館がどんな将来像を目指していくのが良いか、いききたいかというような、この将来像をお一人ずつ簡単に語っていただいて、まとめに替えていただけたらなというふうに思っています、それでいかがでしょう。

グッド：これは日本研究ライブラリアンというよりも、アメリカのライブラリアンの今

の傾向、これから何を狙っているかというところだと思うんですけども、うちの図書館の1階にマイクロフィルムの部屋がありまして、いつも静かなところだったんですけども、そこを去年デジタルスカラーシップコモンという場所に改造しまして、今はメタデータライブラリアンとデジタルスカラーシップコーディネーターというライブラリアンが常駐して、あとインフォメーションサイエンスのPh.D.を持った人2人がリサーチサポーターとして常駐しています。ここは何をするかというと、先生方とか学生たちがビッグデータやリサーチデータのマネジメントを、そういったものをやりたい時に何でも相談にのりますと。あともう少し具体的に言うと、学生たちの中でGISっていうジオグラフィックインフォメーションシステムというものを使って、分析をしてレポートを書くっていうようなものもあるんですけども、このGISのソフトもかなり難しいものですから、その使い方を教えたり。あと通常のスキャナーではできないような大きなスキャナーを用意して、いろんな個人の研究のためのスキャンもサポートしてますと。そういったところを作っています。今準備中なんですけれども、さらにスクリーンを各コーナーに作っているいろんなマルチメディアのプレゼンテーションが出来るような所を作って、その練習場所にするとか、そういったことをしています。

もうひとつは、インフォメーションリテラシー、先程のバゼルさんもおっしゃってましたけれども、うちの大学の場合はティーチングファカルティーに対し、学部生が4年で卒業する時にある一定のインフォメーションリテラシーを持っていないと、その教授の評価を下げる、っていうシステムを作りました。学生たちがインフォメーションリテラシーの試験に受からないのは教授のせいだということになってきまして、そうしたら教授がどんどん我々の方に来まして「教えてくれ」ということで、今は1年生から、教授たちにもティーチングファカルティーと研究に重点を置いた先生がいて、そういうティーチングファカルティーの先生方と組んで、まあ1年生というのは高校までほとんど図書館に行ったことがないような人たちが来るわけですから、図書館の使い方から始まるんですが、その先生方と1年2年3年とタッグを組んで、学生たちのインフォメーションリテラシーの向上を目指す。そういったようなサービスも今は図書館に求められているんだと思います。

田中：今後目指したい図書館像ですけども、私は先程ちょっと述べたような多様性というのを求めていきたいなと思います。ダイバーシティですね。まず、アカデミアというのは凝り固まった考え方じゃなくて多様な考え方があって、今まで何千年も信じられてきたようなことが引っくり返るようなことだと思うんですね。それにはやっぱりアカデミアの中心地である図書館が多様性を受け入れられる、もしくは発信していけるような場所であるべきなんじゃないかと思っています。例えば、今ですね、アメリカの

大学の傾向だと思うんですけれども、非白人の学生がどんどん入学してきています。University of Washington では50%以上が非白人の学生。ただしライブラリアンっていうのは白人で女性で中年っていうのがだいたいイメージとしてあります。これを崩したいという考えをもって動いている図書館の管理職の人たちがいる大学が非常に多いです、私もこれに賛同して活動していきたいなと思っています。

バゼル：ライブラリアンの強みはもちろん専門性っていうのもあるんですけれども、私のような仕事をしていると、先生方がひとつのことに非常に集中してひとつのことに深く造形なさっているのと比べると、私などは深くはないかもしれませんが、全体がもっと見えているところがあるんですね。ひとつのことに集中していろいろなことを考えてらっしゃると、その分野では非常に深いんですけれども、実はお隣さんの別の分野の方が似たような研究なり興味を持たれているのが見えなかったりする時もあるんです。それが今ソーシャルネットワークとかそういうので、横に並べて見えるようにはなってきているんですけれども、ライブラリアンの仕事をしていると意外に広範にさまざまなことが見えることが多いと思います。ハワイ大学マノア校は45人の専門の先生が日本研究センターに属していらっしゃるんで、私は、例えばアンソロポロジーの先生、文学の先生、歴史の先生と、いろんな分野の先生方と接する機会があります。アンソロポロジーの先生が興味を持たれていてこういう資料を使って何か一緒にやりたいと思っている、こちらの歴史の先生も実はそういうのを持っている、というのが私の方からは見えやすい利点っていうのかな、そういう機会があるので、私はライブラリアンとしていろいろな人たちを繋げる役割もしたいなと思っています。だからオーケストラの指揮者じゃないんですけれども、もちろん指揮をするわけではありませんが、この方のこういうのがこちらでも役に立つかもしれない、この方のこういうのといっしょにしたらもっと面白い視点が出てくるんじゃないか、というようなことを共有するのもライブラリアンの仕事じゃないかなと思っています。または、日本から先生をお招きしてハワイ大学のキャンパスで公開講演会を企画したり、ワークショップをしたりするのもこの「つなぐ」「結びづける」ことにつながるとしています。資料と人をつなげることも、人と人とをつなげることも、ライブラリアンの仕事の面白みかな、と思います。

江上：リエゾン、ですね。

バゼル：そうですね。

マクヴェイ：これに関してはちょっと複雑だと思うんですけど、個人的にどう思うかっ

ていうのと、本来の図書館の趨勢というかこれからこうなるだろうというのはちょっと別なような気がします。個人的にどんなふうにやって行きたいかなと思う時には、いわゆる印刷物の出版物ですか、それはわりとどこでも持っているものであるから、ライブラリアンが特に仲介しなくてもユーザーにはアクセスが非常に簡単になってきていることで、やっぱり一次資料的なスペシャルコレクションの構築をしたいなと思います。あと博物館、美術館、アーカイブ、ギャラリー、図書館などが MLA (Museum, Library, Archive) とか GLAM (Gallery, Library, Archive, Museum) という言葉でひとくくりされるような傾向がでてきています。さまざまな媒体の一次資料や貴重資料を所蔵するこういう機関が緩やかに連携するっていうか、それぞれの壁を越えて自由に資料を共有できるようなそういう方向に持っていけることに参加できればいいな、と個人的には思ってます。一方でもうちょっとプロフェッショナルなライブラリーの将来を考えると、やっぱりデジタルスカラシップのサポートだなと思います。

江上：ありがとうございました。大体こんな感じですけども、よろしかったでしょうか。まだまだ聞きたいことあるかと思うんですけど、とりあえずいったんここで締めさせていただきます。もし何かありましたら、例えば先ほど原田先生からご案内いただきました、来週7月1日に行うアンサーシンポジウムの方で、日本側でまたいろいろ議論したいなというふうに思っています。

4人のパネリストの皆さんにどうぞ大きな拍手を。

(編集：江上敏哲)